

## カザフスタンの文書館制度

段上 朋華

【背景】中央アジア諸国はソ連崩壊に伴って独立を果たし、新たな国家体制を作る中で文書館制度も改める必要があった。中央アジア諸国の中でもカザフスタンは独立以降長期政権が続いており、その政策には強く一貫性が表れている。

【目的】そうしたリーダーの下で、カザフスタンの文書館がどのようなシステムを持ち、どのような変化をたどり、それにはどのような理由があったのか、カザフスタンという独立国家がどのような国の在り方を目指し試行錯誤したのかを明らかにすることによって、カザフスタンという独立国家がどのような国の在り方を目指したのかを知ることができる。これによって文書館の国際比較研究の土台とすることおよびカザフスタンの地域研究に寄与することを本研究の目的とする。

【方法】カザフスタン国内の文書館、省庁（文化スポーツ省、内務省、大統領府、法務省）の公式ウェブサイト、関係論文などで文献調査を行った。

【結論】カザフスタンの文書館制度がソビエト時代に現代化が進む中で初めて整備されたことや、カザフスタンの文書館にはどのような種類のものがあるかが明らかになった結果、ソビエト時代の文書館制度をカザフスタンでは現在でも引き継いでいることが判明した。しかし、独立以降のカザフスタンの文書館はカザフスタンの政治システムの独自性を反映している。また、国家アーカイブフォンドという概念に注目すると、アーカイブズ管理局が独立後は文化スポーツ省内に格下げされたことや、新設された特別文書館や大統領文書館によって、中央集権的・統一的なアーカイブズ管理が不可能になった。これによってソビエト時代から引き継がれている国家アーカイブフォンドは実質形骸化したといえる。ソビエト時代は社会全体が中央集権的な組織形態となっており、カザフスタン国内の文書館制度にもその中央集権制・全体主義が反映されていた。しかし独立以降は大統領権威主義のもとで、ソビエト時代にはあったイデオロギー性や徹底した中央集権制が薄れた。カザフスタンの文書館制度はそうした政治体制が反映されているといえるだろう。ソビエト連邦崩壊以降、各独立国では脱ソ連化が進められていったが、カザフスタンも同様に脱社会主義化を進めていく中で、文書館の制度も社会構造と併せて変わっていく必要があった。しかし文書館制度の改革は手探りで、独立から27年の間に試行錯誤を繰り返している。民間文書館に対する規制が不十分であるなど、今後も改善していかなければならない点がある。

本稿ではカザフスタン共和国の文書館に焦点を当てたが、同時期に独立したカザフスタン以外の中央アジア諸国の文書館制度がどのような変遷を遂げてきたのか、どのような関連法があるのかといった文書館制度を明らかにすることによって、さらにカザフスタンの文書館に対する理解が深まるだろう。

(指導教員 パールィシェフ・エドワルド)